

きました。写真には、一面の大海原に向かって笑顔でやしの実を投げる参加者の姿が、たくさん写っていました。動画で見た海の色は、私が今まで見たことのないような深い青色で、紺碧という言葉はこの色のことをいうんだろうなと思う色でした。この海から、やしの実たちは、目に見えない潮の流れに乗り、私たちの住む渥美半島まで流れ着くのかと考えると、とても不思議な気持ちになりました。

母は、何かのインタビューで、

「何だか、自分の子供と離れ離れになるような、愛おしい気持ちで投げ入れました。」

と、答えていました。きっと、参加された人達も、母と同じような気持ちでやしの実を投げ入れ、知らない誰かにつながるかもしれないという望みを持ちながら、このイベントに参加しているんだろうなと思います。

私も一度、家族で石垣島に行ったことがあります。でも、小さい頃だったので、写真やビデオでしか、その時の記憶がありません。石垣島には母の友人がいて、私が生まれる前から、ずっと交流を続けています。

田原市も、遥か遠くの石垣島と、やしの実のイベ

ントを通して交流を続けています。SNSの動画や写真を通して、その場になくても、まるでイベントに参加しているかのように、リアルタイムで情報が伝わる便利な世の中です。だから、届くか届かないか分からないけど、いつか拾ってくれるであろう誰かの元へ届いてほしいと願うことで、間接的にイベントに参加している私も、温かい気持ちになれるのです。

きっと、大祖母と六年生の女の子の出会いも、偶然ではないと思います。やしの実がつかないだ時間や場所、年齢をも超える、新しい出会いなんだと思います。

海を漂うやしの実には、持ち主一人一人の

「いったいどこの海岸に流れ着くのだろう。」

「知らない誰かが見つけてくれるかな。」

という、淡い望みと、大きな期待が込められています。私は、他の人が大切に思う気持ちを、自分のことのように大切にだと共感できる大人になろうと心に誓い、誰かの大切なやしの実が流れ着いていないか、また海岸へ探しに行こうと思います。

